

郷土における社会認識の成立過程にみられる諸概念関連構造の差異と変容の究明 1 —郷土における社会認識の特質—

飯島敏文

本研究は、子どもたちが郷土において社会認識を形成する過程に着目し、その特質を諸概念関連構造に着目して明らかにすることを目的とする。具体的には、郷土の概念と特質を整理した上で、郷土教育の意義について論じる。さらに、郷土における子どもの経験と社会認識の成立過程の関連性を探り、郷土特有の諸概念関連構造とその変容について考察する。最後に、情報化社会における郷土の意義を再確認し、子どもたちの社会認識成立過程を支援するための方策を提案する。

現代社会において、子どもたちは多様な情報や価値観に囲まれながら成長している。情報技術の発達により、子どもたちが接する環境は急速に変化し、グローバル化に伴う様々な課題に直面することもしばしばある。このような状況下で、子どもたちが自己のアイデンティティを形成し、社会において適切に行動するための基盤として、子どもの直接的な経験の対象となり、子どもの知識獲得の基盤ともなる郷土の役割に改めて注目したいと考える。

郷土は、単なる物理的な環境ではなく、そこに暮らす人々の歴史、文化、価値観が織り成す複雑な存在である。子どもたちは、郷土において多様な経験を積むことで、自己の存在意義を見出し、社会に対する理解を深めていく。したがって、郷土が子どもたちの社会認識の成立過程に与える影響を明らかにすることは、教育研究において重要な課題であると言える。

本研究を通して、郷土が子どもたちの人格形成や社会性の発達に果たす役割を明確化し、情報化社会における郷土教育の在り方を探究することを目指す。また、本研究の成果は、教育現場における実践や教育行政の方針に資する知見を提供するものとしたい。

キーワード

郷土 経験 社会認識 多様性

1 長野県出身奈良県在住である筆者の郷土

ー郷土意識の変遷と地理的境界のフレキシビリティー

郷土意識は、個人のアイデンティティ形成に大きな影響を与える要因の一つである。しかし、現代社会において、人々の移動や地方自治体の合併などにより、郷土の概念は曖昧になりつつある。本研究では、長野県出身で奈良県在住の筆者の事例を通して、郷土意識の変遷と地理的境界のフレキシビリティについて考察する。

1) 筆者の郷土意識の変遷

筆者は長野市で生まれ育ち、18年余りを過ごした後、首都圏、名古屋市内、大阪府内を経て奈良県に移住し、現在に至るまで30年近く在住している。筆者にとって、長野市や長野県は、物心ついた頃からの情意的な結びつきがある郷土であり、現在でも強い帰属意識を持っている。しかし、筆者の郷土意識は、長野市の地理的範囲の変化や、奈良県での生活経験によって、徐々に変容してきたと考えられる。

2) 長野市の地理的境界の変遷

筆者の郷土である長野市は、市政確立時の1897年には面積が10 km²に満たなかったが、筆者の生誕時（1961年）には周辺市町村を合併し、160 km²近くになっていた。さらに、筆者が学齢に達する前には、父の実家があった更級郡川中島町や篠ノ井市などが長野市に合併され、面積は400 km²を超えるに至った。筆者が長野市を離れてからも、2回の合併があり、現在の長野市の面積は830 km²を超えている。このように、長野市の地理的境界は、時代とともに大きく変化してきた。

3) 地理的境界の曖昧さと郷土意識

筆者は、中高生時代に、篠ノ井市や川中島町を犀川の南岸の街ととらえていたため、合併という人為的拡大に若干の違和感を覚えた。千曲川東岸にある須坂市や小布施町は、長野市街地との距離で言うと旧篠ノ井市や旧川中島町とさほど変わらないが、筆者にとっても長野市民にとっても完全に別の自治体として認識されている。このように、地理的境界の設定は、個人の郷土意識に影響を与えるが、その境界は必ずしも明確ではなく、時代とともに変化する。また、長野県の一部であった馬籠宿（木曾郡山口村）が、2005年に岐阜県中津川市に編入合併された事例は、県境を超えた地理的境界のフレキシビリティを示している。

4) 郷土意識と地理的境界の関係性

本研究では、長野県出身で奈良県在住の筆者の事例を通して、郷土意識の変遷と地理的境界のフレキシビリティについて考察した。筆者の郷土意識は、長野市の地理的範囲の変化や、奈良県での生活経験によって変容してきた。また、地理的境界の設定は、個人の郷土意識に影響を与えるが、その境界は時代とともに変化し、曖昧さを帯びている。今後、人々の移動や地方自治体の合併などが進む中で、郷土意識と地理的境界の関係性について、さらなる考察が必要であろうと思われる。

2 郷土概念の複雑性とアイデンティティ形成における役割

郷土は、一般的に生まれ育った土地を指す言葉として使用されているが、その概念は単純ではない。本研究では、郷土概念の複雑性と、個人のアイデンティティ形成における郷土の役割について考察する。また、現代社会において郷土教育が果たす役割についても言及する。

1) 郷土概念の複雑性

郷土は、物理的な環境だけでなく、そこに住む人々の精神的な結びつきを含む存在である。したがって、郷土の範囲や定義は、認識主体によって異なる可能性がある。例えば、ある人にとっての郷土は、生まれ育った町や村であるかもしれないが、別の人にとっては、県や地方全体を指すこともある。また、郷土内部においても、文化、風俗、言葉、自然環境などの要素に基づいて、細かな境界が存在する。これらの境界は、認識主体の立脚点からの距離や、物理的な障壁によって、その強弱が変化する。つまり、郷土は一定の均質性を持ちながらも、内部に濃淡を有する複雑な存在なのである。

2) 郷土とアイデンティティ形成

郷土は、個人のアイデンティティ形成に不可欠な役割を果たしている。人は、自分が生まれ育った土地や、強い精神的な結びつきを持つ場所を通して、自己の存在意義や価値観を見出していく。郷土は、個人の歴史や文化的背景を形作る基盤であり、そこでの経験や人間関係が、個人の人格形成に大きな影響を与える。また、郷土は、個人が所属する共同体の一部でもある。郷土の一員であるという意識は、個人に安心感や連帯感をもたらし、社会における自己の位置づけを明確にする。したがって、郷土は、個人のアイデンティティ形成に欠かせない存在であると言える。

3) 現代社会における郷土教育の役割

現代社会は、グローバル化の進展により、地球規模の多様な問題に直面している。しかし、これらの問題を解決するためのアプローチは、必ずしも地球規模である必要はない。むしろ、ローカルな視点から、具体的な行動を積み重ねていくことが重要である。郷土教育は、子どもたちに郷土の歴史や文化を学ばせ、郷土への理解を深めると同時に、郷土に関わる当事者意識を育てるものである。郷土の事例を通して、地球規模の問題と郷土との関わりを考える機会を提供することで、子どもたちは、自分たちが果たすべき役割について考えを深めることができる。したがって、郷土教育は、現代社会における問題解決のための重要な基盤となり得る。

4) 子どもたちに求めるもの

郷土は、物理的な環境だけでなく、精神的な結びつきを含む複雑な存在である。それは、個人のアイデンティティ形成に不可欠な役割を果たしており、現代社会における問題解決のための基盤ともなり得る。郷土教育を通して、子どもたちが郷土との関わりを深め、地球規模の問題解決に向けて行動する力を育むことが求められている。

3 郷土における子どもの経験が人間的成長と能力形成に与える影響

子どもの成長と発達において、環境が果たす役割は非常に大きい。特に、子どもが生まれ育った地域である郷土は、子どもの経験の質や量に大きな影響を与える。本研究では、郷土における子どもの経験に着目し、それが人間的成長や知識獲得、能力形成にどのような影響を与えるのかについて考察する。

1) 郷土の特性と子どもの経験

郷土は、一定の地理的範囲とそこに暮らす人々によって構成される。各郷土は、固有の歴史、文化、伝統、自然環境を有しており、それらが複雑に絡み合って独自の生活空間を形成している。子どもたちは、この独特な環境の中で様々な経験を積むことになる。郷土における子どもの経験は、大きく分けて二つの側面がある。一つは、郷土の歴史や伝統に触れ、現代社会における郷土の価値を感得する経験である。子どもたちは、郷土の祭りや行事に参加したり、地域の大人から昔話を聞いたりすることで、郷土への理解を深めていく。もう一つは、郷土の具体的な課題に取り組む経験である。地域の環境問題や高齢化問

題など、郷土が抱える様々な課題に子どもたちが主体的に関わることで、問題解決能力や協調性を身につけていくことができる。

2) 郷土における経験の差異と教育的アプローチ

郷土は、地理的条件や歴史的背景によって、その特性が大きく異なる。したがって、子どもたちが郷土で得る経験も、地域によって様々である。このような郷土の差異や、郷土における経験の差異に着目することは、教育的観点から重要な意義を持つ。それぞれの郷土の特性を踏まえた上で、子どもたちにとってより有益な経験を提供するための教育的アプローチを模索することが求められる。例えば、歴史的遺産に恵まれた郷土では、その価値を子どもたちに伝える体験学習を充実させることが有効だろう。一方、自然環境に恵まれた郷土では、自然体験活動を通して環境教育を推進することが考えられる。このように、郷土の特性に応じた教育的アプローチを開発・実践することで、子どもたちは郷土で豊かな成長機会を得ることができるのである。

3) 郷土における経験と人間的成長・能力形成

郷土における経験は、子どもたちの人間的成長や能力形成に大きく寄与する。郷土の歴史や文化に触れることで、子どもたちは自分のルーツを知り、アイデンティティを確立していく。また、郷土の大人や仲間との交流を通して、コミュニケーション能力や社会性を身につけていく。さらに、郷土の課題解決に取り組む経験は、子どもたちの問題解決能力や協調性を高める。地域の人々と協力しながら、実社会の問題に立ち向かうことで、子どもたちは自分の能力を試し、成長することができる。このように、郷土における経験は、子どもたちの人格形成や能力開発に重要な役割を果たしているのである。

4) 子どもたちの豊かな成長を支援する

本研究では、郷土における子どもの経験に着目し、それが人間的成長や能力形成に与える影響について考察した。郷土は、子どもたちに多様な経験の機会を提供する場であり、その経験の質や量は、子どもの成長に大きな影響を与える。したがって、郷土の特性を踏まえた教育的アプローチを開発・実践することが、子どもたちの豊かな成長を支援する上で重要である。

また、郷土における経験は、子どもたちの人間的成長や能力形成に寄与することが明らかになった。郷土の歴史や文化に触れ、地域の課題解決に取り組むことで、子どもたちは自己のアイデンティティを確立し、社会性や問題解決能力を身につけていく。このように、郷土は子どもたちの人格形成や能力開発の基盤となる重要な存在なのである。

4 郷土における子どもの社会認識の成立過程とその変容

子どもの社会認識の形成において、直接的な経験が果たす役割は非常に大きい。特に、子どもが生まれ育った郷土における経験は、社会認識の基盤となる。本研究では、郷土において子どもの社会認識がどのように成立し、発達段階に応じてどのように変容していくのかについて考察する。

1) 直接的経験と社会認識の成立

子どもは、生まれた瞬間から周囲の環境と相互作用しながら成長していく。様々な状況に適応し、そこで獲得した経験をもとに新たな理解を生み出していく。この過程において、直接的な経験が果たす役割は極めて重要である。特に、郷土における経験は、子どもの社会認識の成立に大きな影響を与える。郷土の歴史や文化に触れることで、子どもは自分が属する社会の独自性や価値を認識するようになる。また、地域の人々との交流やコミュニケーションを通して、多様な視点や価値観に触れることができる。これらの経験は、子どもの社会認識の基盤を形成する上で欠かせないものである。

2) 郷土における経験と社会認識の深化

郷土における経験は、子どもの社会認識を深化させる上でも重要な役割を果たす。郷土の歴史や文化に対する理解が深まることで、子どもは郷土の独自性や価値をより深く認識するようになる。また、郷土が抱える課題に直面し、その解決に向けて取り組むことで、問題解決能力や批判的思考力が向上する。

さらに、郷土における経験は、子どもの情意的な発達にも大きな影響を与える。郷土の人々との絆を深め、郷土の自然や文化に親しむことで、子どもの郷土に対する愛着が育まれる。このような情意的な発達は、子どもが郷土に生きる認識主体としての意識を醸成する上で重要な基盤となる。

3) 発達段階に応じた社会認識の変容

子どもの社会認識は、発達段階に応じて変容していく。各発達段階において、子どもに適切な環境や経験を提供することが、社会認識の深化と変容を促す上で重要である。例えば、幼児期には、身近な人々との関わりを通して基本的な社会性を身につけることが求められる。児童期には、学校教育を通して知識を体系的に学習し、社会の仕組みについての

理解を深めていく。青年期には、自己の価値観を確立し、社会的な課題に対して主体的に関わっていくことが期待される。

このような発達段階に応じた適切な経験を積むことで、子どもは対象に対する理解を深め、異なる文脈での価値を発見していく。この過程で、子どもの思考や行動が変容し、社会的な課題や問題に対応する能力が向上していくのである。

4) 社会認識の基盤としての直接的経験

本研究では、郷土において子どもの社会認識がどのように成立し、発達段階に応じてどのように変容していくのかについて考察した。郷土における直接的な経験は、子どもの社会認識の基盤を形成し、その深化と変容を促す上で重要な役割を果たすことが明らかになった。

また、子どもの発達段階に応じた適切な環境や経験を提供することの重要性も示された。各発達段階において、子どもが主体的に経験を積み、社会的な課題に関わっていくことで、社会認識が深化し、社会に対応する能力が向上していくのである。

今後は、郷土教育の在り方を検討する上で、子どもの発達段階や郷土の特性を踏まえた教育的アプローチを開発・実践していくことが求められる。そうすることで、子どもたちは郷土において豊かな社会認識を育み、社会の形成者として成長していくことができるだろう。

5 情報化社会における郷土教育の役割と子どもの社会認識の変容

現代社会において、子どもたちを取り巻く環境は急速に変化している。情報化やグローバル化の進展に伴い、多様な価値観や膨大な情報に触れる機会が増加している。このような状況下で、子どもたちが社会を適切に認識し、主体的に行動するための力を育成することが求められている。本研究では、郷土教育に着目し、情報化社会における郷土教育の役割と、子どもの社会認識の変容について考察する。

1) 子どもの社会認識成立過程と影響要因

子どもの社会認識は、様々な要因が複雑に絡み合いながら形成される。家庭、学校、地域社会など、子どもを取り巻く環境は、社会認識の成立過程に大きな影響を与える。特に、子どもが直接的な経験を積む地域社会は、社会認識の基盤を形成する上で重要な役割を果たす。

地域社会における経験を通して、子どもは社会の仕組みや人間関係について学んでいく。地域の歴史や文化に触れ、地域の課題解決に取り組むことで、子どもは社会の一員としての自覚を育み、社会に対する理解を深めていく。このように、子どもの社会認識の成立過程を分析することは、教育理論と実践において重要な意義を持つ。

2) 情報化社会における社会認識の変容

情報化社会の急速な進展は、子どもの社会認識の在り方に大きな影響を与えている。インターネットの普及により、子どもたちは容易に多くの情報に触れることができるようになった。しかし、その一方で、情報の質や信憑性を見極める力や、情報を適切に活用する能力が求められるようになった。

また、グローバル化に伴い、多様な価値観や文化に触れる機会が増加している。異なる背景を持つ人々と共生するためには、多様性を尊重し、異文化を理解する力が必要とされる。このように、情報化社会における子どもの社会認識は、従来とは異なる視点や能力を必要としているのである。

3) 郷土教育の役割と諸概念関連構造の変容

情報化社会における子どもの社会認識の変容に対応するために、郷土教育が果たす役割は大きい。郷土は、子どもたちが直接的な経験を積む場であり、社会認識の基盤を形成する上で重要な役割を果たす。郷土が提供する学習環境を効果的に活用することで、子どもたちの知識や経験を深め、多様な価値観を持つ人々と共生する力を育むことができる。

また、郷土特有の諸概念関連構造に着目し、それらが変化する過程を研究することは、子どもたちに郷土の特性や価値を理解する力を育む上で重要である。郷土における人々の生活や産業、自然環境などは、相互に関連し合いながら独自の概念構造を形成している。これらの諸概念関連構造を理解することで、子どもたちは郷土の特性を多面的に捉え、その価値を認識することができる。

さらに、諸概念関連構造は時代とともに変化していく。社会の変化に伴い、郷土の在り方も変容していくからである。郷土における諸概念関連構造の成立と変容の過程を追究することで、子どもたちは郷土の歴史的な変遷を理解し、未来の郷土の在り方を考える力を育むことができる。このように、郷土教育は子どもたちが地域とつながり、次世代に伝えていくべき価値や意義を見出す上で重要な役割を担っているのである。

4) 社会認識の基盤を形成する郷土教育

本研究では、情報化社会における郷土教育の役割と、子どもの社会認識の変容について考

察した。情報化やグローバル化が進展する中で、子どもの社会認識は従来とは異なる視点や能力を必要としている。郷土教育は、子どもたちが直接的な経験を積む場を提供し、社会認識の基盤を形成する上で重要な役割を果たす。

また、郷土特有の諸概念関連構造とその変容過程に着目することで、子どもたちは郷土の特性や価値を多面的に理解し、未来の郷土の在り方を考える力を育むことができる。郷土教育を通して、子どもたちが地域とつながり、次世代に伝えていくべき価値や意義を見出すことが、情報化社会における教育の重要な課題であると言えよう。

今後は、情報化社会の進展に対応した郷土教育の在り方を探究し、子どもたちの社会認識の変容に適切に対応していくことが求められる。そのためには、学校、家庭、地域社会が連携し、子どもたちの主体的な学びを支援する体制を構築していく必要がある。郷土教育の可能性を追究し、実践していくことで、子どもたちは情報化社会を生き抜く力を身につけ、よりよい社会の形成者として成長していくことができるだろう。

6 情報化社会における郷土の意義と子どもの人間形成

情報化社会の急速な進展に伴い、子どもたちを取り巻く環境は大きく変化している。インターネットやスマートフォンの普及により、子どもたちは膨大な情報に容易にアクセスできるようになった。一方で、情報化社会における人間関係の希薄化や、実体験の不足が懸念されている。このような状況下で、子どもたちの人間形成における郷土の意義を再考することが求められている。本研究では、情報化社会における郷土の意義と、子どもの人間形成における郷土の役割について考察する。

1) 情報化社会における郷土の変容

情報化社会の進展は、郷土の概念にも大きな影響を与えている。かつては、交通や通信の手段が限られていたため、郷土は物理的に限定された空間であった。しかし、情報技術の発達により、人々は容易に遠隔地とつながることができるようになった。このため、郷土の概念は物理的な空間を超えて拡張しつつある。

また、情報化社会においては、バーチャルな空間が新たな「郷土」となる可能性もある。インターネット上のコミュニティや、ゲームの仮想世界は、子どもたちにとって重要な社会的体験の場となっている。このように、情報化社会における郷土は、物理的な空間とバーチャルな空間が融合した、複雑な様相を呈しているのである。

2) 子どもの人間形成における郷土の役割

子どもの人間形成において、郷土が果たす役割は大きい。郷土は、子どもたちが社会の一員として成長していく上で、重要な基盤となる。郷土の自然や文化、人々との交流を通して、子どもたちは自己のアイデンティティを形成し、社会性を育んでいく。

また、郷土は子どもたちに「居場所」を提供する。家庭や学校とは異なる、第三の社会的空間として、郷土は子どもたちの心の拠り所となる。郷土での活動や体験を通して、子どもたちは自己肯定感を高め、resilience（回復力・復元力）を身につけていく。このように、郷土は子どもたちの健全な成長と発達を支える上で、欠かせない存在なのである。

3) 情報化社会における郷土教育の在り方

情報化社会における郷土の変容を踏まえ、郷土教育の在り方を再考する必要がある。従来の郷土教育は、物理的な空間としての郷土を重視してきた。しかし、情報化社会においては、バーチャルな空間も子どもたちの成長に大きな影響を与えている。したがって、情報化社会における郷土教育は、物理的な郷土とバーチャルな郷土の両方を視野に入れる必要がある。

具体的には、以下のような取り組みが求められる。まず、物理的な郷土の特性を活かした体験的な学習を充実させることである。自然体験や社会体験を通して、子どもたちが郷土への理解を深め、愛着を育むことができる。また、バーチャルな郷土についても、その特性を理解し、適切に活用していくことが重要である。インターネット上のコミュニティにおけるルールやマナーを学ぶことで、子どもたちはバーチャルな空間での社会性を身につけることができる。

さらに、物理的な郷土とバーチャルな郷土をつなぐ学習活動も有効である。例えば、郷土の歴史や文化をデジタルアーカイブ化し、インターネットで発信することで、子どもたちは郷土への理解を深めると同時に、情報発信の力を育むことができる。このように、情報化社会における郷土教育は、物理的な郷土とバーチャルな郷土の特性を活かしながら、子どもたちの成長を支えていくことが求められているのである。

4) 郷土を通じた地球社会への貢献

情報化社会における郷土の意義は、子どもの人間形成にとどまらない。郷土は、グローバルな課題の解決に向けた出発点となる可能性を秘めている。郷土の自然環境や文化を大切にすることを育むことは、地球環境問題への関心を高めることにつながる。また、郷土の課題解決に主体的に取り組む経験は、グローバルな社会課題の解決に向けた実践力を育む。

このように、郷土への働きかけを通じて、子どもたちは地球社会への貢献の方法を学んでいく。自らを育んでくれた郷土に根ざしながら、グローバルな視野を持って行動する力を身につけることが、これからの時代を生きる子どもたちに求められているのである。

5) 拡張する郷土

本研究では、情報化社会における郷土の意義と、子どもの人間形成における郷土の役割について考察した。情報化社会の進展に伴い、郷土の概念は物理的な空間を超えて拡張しつつある。また、バーチャルな空間が新たな「郷土」となる可能性も示唆された。

子どもの人間形成において、郷土は自己のアイデンティティや社会性を育む基盤となる。情報化社会における郷土教育は、物理的な郷土とバーチャルな郷土の特性を活かしながら、子どもたちの成長を支えていくことが求められる。さらに、郷土への働きかけを通じて、子どもたちは地球社会への貢献の方法を学んでいく。

情報化社会においても、郷土は子どもたちの人間形成にとって欠かせない存在である。郷土の意義を再認識し、時代に即した郷土教育を実践していくことが、これからの社会を担う子どもたちを育てる上で重要なのである。

7 おわりに

本研究では、子どもたちが郷土において社会認識を形成する過程とその特質について、諸概念関連構造に着目して考察してきた。情報化社会の進展に伴い、郷土の概念や子どもたちを取り巻く環境は大きく変化しているが、郷土が子どもたちの人間形成に果たす役割の重要性は不変である。むしろ、多様な情報や価値観が錯綜する現代社会において、子どもたちが自己のアイデンティティを確立し、社会の中で適切に行動するための基盤として、郷土の意義はますます高まっていると言えよう。

時代に即した郷土教育の在り方を探究し、実践していくことは、教育者に課せられた重要な責務である。物理的な郷土とバーチャルな郷土の特性を活かしながら、子どもたちの成長を多角的に支援する方策を講じていく必要がある。さらに、郷土への働きかけを通じて、子どもたちが地球社会への貢献の方法を学ぶことができるよう、教育内容の充実を図ることも求められる。

本研究の成果が、教育現場における実践や教育行政の方針決定に資する知見となり、子どもたちの豊かな成長を支援する一助となることを心から願ってやまない。情報化社会においても、郷土の意義を再認識し、時代に即した郷土教育を推進していくことが、これからの社会を担う子どもたちを育てる上で不可欠である。

参考文献

1. 文部科学省『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 社会編』
文部科学省ホームページ
https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afielldfile/2019/03/18/1387018_003.pdf
最終閲覧 2024 年 3 月 24 日
2. 文部科学省『中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 社会編』
https://www.mext.go.jp/content/20230308-mxt_kyoiku02-100002607_003.pdf
最終閲覧 2024 年 3 月 24 日
3. 佐藤一子『地域学習の創造: 地域再生への学びを拓く』（東京大学出版会、2015 年）
4. 木全清博『地域に根ざした学校づくりの源流: 滋賀県島小学校の郷土教育』（文理閣、2007 年）
5. 清水章夫『郷土を生かす社会科教育』（さきたま出版会、1986 年）
6. 加藤幸次『価値観形成をめざす社会科学習』（黎明書房、1982 年）
7. ベネッセ教育総合研究所編『第 6 回学習指導基本調査（小学校・中学校版）』
ベネッセ総合教育研究所ホームページ
<https://berd.benesse.jp/shotouchutou/research/detail1.php?id=5080>
最終閲覧 2024 年 3 月 24 日